

生徒の“心”に火をつける!

## 続 「アクティブ・リーディング」の実践

順天中学校・高等学校の和田玲先生とその研究チーム  
「例の会」との共同研究から生まれた実践例。  
生徒の感性をいかに刺激し、はつらつとした自己表現へと導くか。  
徹底した議論と手直しを繰り返して磨き上げた珠玉の指導案です。

今回の授業者：加納由美子（女子聖学院中学校高等学校 教諭）



### その18 「点字教育」の指導例

**Braille Education**

①Braille is a system of communication developed by a blind person that enables sightless people to learn to read and write. ②In the 1820s, Louis Braille of France learned about a method that allowed soldiers to send messages that they could read at night without light. ③He used this method to develop an alphabet system that people could read by touch. ④Today we know that if people who cannot see learn Braille from an early age, it is certain that they can learn to read and write as well as sighted people. ⑤For example, experienced readers of Braille can read as quickly as experienced readers of regular books. ⑥Moreover, studies show that blind students who have learned Braille from an early age do as well or better on vocabulary and reading comprehension tests than students who see. ⑦Clearly, it is important to teach Braille to visually challenged children from a young age.

和田 玲『アクティブ・リーディング Basic』(学校専売品、アルク)、Lesson 5

今回は、高校1年生の1学期後半に行った点字教育の授業についてご紹介します。このレッスンを通して、「誰にとっても当たり前のこと当たり前に」を実現するノーマライゼーションの視点を、生徒たちに実感させることを狙いとします。

### Introduction — 便利グッズの始まりは？

初めに「なんでもバスケット」を英語で行います。鬼になった生徒は、お題カードの山から1枚引いて、クラスに質問をします。「ライターを使ったことがある人」「家にリモコン付き家電がある人」「スマート

フォンのSiriを使う人」などです。その後、クラス全員に“Actually, there is a common point among the questions. What is it?”と質問をします。“Introducing IT...?”と生徒たちは困惑します。そこで、“They were all made for people with disabilities.”と伝え、身体障がい者のためのライターやリモコン付き家電、視覚障がい者のためのAIアシスタントであることを説明すると、生徒は驚きます。これらは、障がいのある人が平等に生活する社会を実現する助けになっていることを説明。その上で、“Surprisingly, we have something useful that was developed about 200 years ago for blind people. It helps them enhance their



加納由美子先生

女子聖学院中学校高等学校教諭。2017年に系列校（男子校）の先生と共に「パラスポーツ映像制作プロジェクト」を発足。有志の生徒たちとパラリンピックを盛り上げる方策を日々模索中。映像制作やPR活動を通じて多様性への意識を芽生えさせる取り組みにもなっており、女子校と男子校の協働ということもあって注目を集めている。

individual comprehension. What is it?”と問い合わせ、本文へと導入します。

### Jump — 障がいは障壁にはならない!?

内容理解・音読・リテリングの後、第7文に着眼。「視覚障がいのある子どもに幼い頃から点字を教えることが重要である」と述べられています。では、日本全国の約30万人の視覚障がい者のうち何割が点字を習得しているでしょうか。生徒たちは、高い数字を思い浮かべますが、実態は1割であることを伝え、“Why does Japan have a low braille literacy rate?”と問い合わせます。導入で紹介した機器の発達によるのではないか、と答える生徒もいます。

ここで、“If you want to hang out with your friends who are visually challenged, where would you go?”と質問します。次の選択肢から一つ選び、理由も述べてもらいます。「A：水族館、B：映画館、C：パラスポーツ観戦、D：カラオケ」。最も多かった回答は「D：カラオケ」。しかし、実際は今やどの選択肢も一緒に楽しむことができるのだと伝えると、生徒たちは驚きます。ここで、各場面で活躍する製品を画像やリーディングで紹介。その中でも、映画を楽しむための音声ガイドアプリ「UD Cast」について、本文で使われている論理展開や表現を用い、Outputのモデルを示します。

### Output — 当たり前のこと当たり前に

このように、障がいが障壁と考える必要はもはやなく、「誰にとっても当たり前のこと当たり前に」を実現できる社会を私たちは目指していくべきではないだろうかと伝えます。

例として、Apple製品に搭載の「スイッチコントロール機能（手を使わずに機械操作可能な機能）」のCMを紹介（YouTubeで「Apple アクセシビリティ」と検索）。全ての人のために作られたテクノロジーやデザインによって、誰だって大好きなことができるようになる——生徒たちには、そのような製品をリサーチして、「①どのような製品かを伝え、②その製品の効果を紹介し、③聴衆へのメッセージを述べる」というプレゼンテーションをしてもらいました。シャンプーボトルにあ

るギザギザや、駅構内で見掛けるクネクネした手すり、レストランの紙ナプキンもユニバーサルデザインだった、などの発表をしてくれました。「知ることによって、日常の景色の見方が変わっていく」とコメントしてくれた生徒もいます。

授業を通して英語を学ぶだけでなく、自分の可能性を広げ人生を豊かにしてくれる生徒が1人でも増えるよう、これからもアクティブで「深い読み」の実践を追求していきたいと思います。

### 監修 和田 玲先生の総括

#### 生徒たちの内的変容を触発

人は、一つを知れば一つ意見を持つようになり、一つ意見を持てば（誰かのために）行動したくなるものです。今回の実践では、アクティブな仕掛けで導入を図り、Jumpで生徒の「知ってるつもり」をたたき、気付きを生み出すことに成功しています。そして、調査・発表活動を通じて、生徒たちを確実に思いやりあふれる人たちへと変容させていく見事な展開です。

今回の白眉は、Output活動。新しい道具とは、開発者がさまざまな願いを込めて創造するものです。そこに着目した発表活動は非常に有意義で、主な利点が三つあります。①発表に多様性が生まれ、どの発表にも興味が持ちやすい点、②生徒たちの自己有用感を喚起できる点、③学びの意義を実感できる点です。

発表活動は課題が命です。「多様性を引き出す」とは、「生徒の個性を引き出す」ことと同義です。驚きや気付きを発生させやすい課題であればあるほど、生徒の発表内容には価値が増します。加納先生のOutput課題は、ここの配慮が見事です。また、こうした社会的意義を持つ事象の紹介は、生徒に自己有用感を与えるのにも効果です。開発者の願いを代弁することで聴衆からのポジティブな反応が得られ、自分の発言は価値あるものだと実感できるからです。さらに、自分たちは何のために学ぶのか、自分は誰のために自分の学びや技術を生かしていきたいのか。そんなことを真剣に考えるきっかけともなるはずです。

「知ることで、日常の景色の見方が変わっていく」という生徒の言葉は、加納先生の実践が生み出した生徒の内的変容の証しに他なりません。これこそ“言葉の教育”が理想とすべき好例であると素直に感動しました。加納先生、素晴らしい授業をありがとうございました。